

長野県革新懇ニュース

2023年2月号
発行日2月10日
会費 2,000円
購読料 3,000円(送料込)
振替 00510-3-15971



発行 日本と信州の明日をひらく県民懇話会
(長野県革新懇) 発行人: 山口光昭 編集長: 高村裕
〒380-8790 長野市県町593 高校教育会館内
TEL: 026-234-1231 FAX: 026-234-2219 メール: mail@nagano-kakushinkon.com

====今号の主な記事====

- 1面 森谷明仙さんインタビュー
- 2面 1面続き、「近現代信州の歴史回廊」関秀雄さん
- 3面 本の紹介『神秘の音色』、核兵器禁止条約署名提出読者の声、漢字パズル
- 4面 雨よ降れ「朽ちる」 飯沼誠一郎さん
鎌田山の通信施設用地下壕 北原高子さん
映画評論『スーパー30』 内山到さん

長野県革新懇

検索



1951年大岡村(現長野市大岡)生まれ。1981年岩崎書店退職後、堀野書道学校入学。1982年森谷書道教室開塾、東京都社会教育会館講師、1984年堀野書道学校特別研究科入学、1992年同研究科卒業、以後、総合研究科で学ぶ。1995年さいたま市にて第1回個展「筆のあと」開催、1997年現在の書風を発表。以後、各地で個展を開催。

ことば探しは、自分探し 心のありようを求めること

もりや めいせん さん
森谷 明仙 さん

(書家)

ひたすら書き続ける 日々をすこす

Q 書道を始められたきっかけをお聞かせください。

初めて筆を持ったのは、小学校1年生の時です。旧大岡村には塾もなかったため、父が私に筆をとらせてくれました。農作業が終わった後の親子塾のようでした。それが書道人生の始まりです。小学校の先生が、私の書を県内の色々な展覧会に出してくださりました。高校を卒業して都内の出版社に就職しましたが、結婚、出産後子どもの体調が思わしくなくて、やむなく仕事を辞めました。ただ、経済的には共働きをしていかなくはならない状況でしたので、子どもの体調も安定し、次の仕事を考えた時、父は言いました。「なぜ書をやらな

いのか。書の道があるのに」と。そのことばに押されて書道塾を開こうと決意して30歳の時に書道の専門学校に入学しました。子どもがまだ3歳で、子連れの生徒は私だけでしたが、資格を取るために1年間のつもりが15年間も通い続けてしまいました。入学式の時、理事長先生が挨拶の中で「私は1日8時間、10年間書き続けて今です」と話されました。「大変な世界に入ってしまった」とびくつきりして、1日8時間も書けるものかと思いました。実際にやってみると、1日8時間ではとても足りなくて、1日10時間、夜中もひたすら書くという生活でした。何回も倒れたり、お稽古の途中に救急車で病院に運ばれたり、失明と思われるほどの眼底出血をしたり、色々ありました。ただ夢中にやっていたという感じでした。

川村驥山の書に 触発されて

Q 現在の書風はどのように形成されたのですか？

大きな契機は、父が亡くなった時です。誰に褒められるよりも父に褒められることが私の一番の励みで喜びだったので、その時にはこれからどうしたらいいかわからなくなっていました。法要の後のことです。父が生前によく「驥山館」に行ってみなさいと言っていたことを思い出して、今日こそはと篠ノ井にある同館を訪れました。その時に、川村驥山が5歳の時に書いたという書に出会いました。「大丈夫」という書でした。漢字で大きく書いてあって、印は驥山の小さな手形でした。それを見た時には、本当に衝撃でした。その書が私に「大丈夫だから」と言ってくれているのです。その時、書には励まし、共感し、背中を押してくれる力があることに気づきました。

にそんなことを考えて埼玉の家まで帰ったことを覚えています。実際やってみたらとても大変なこと、色を使うとお絵かきみたいになってしまふ、書を書けば無理した形になってしまふ、ことばを選べば不自然な言い回しになってしまふ、とても作品といえるようなものは書けず、消化不良の時期を過ごしました。そんなことを繰り返している時に、生徒さんたちが面白いから私たちも書いてみたいと言ってくさいました。それならもう一度がんばってみようかと。それが今の書体や書風の始まりです。

書は文学、音楽 そして哲学でもある

一つの形ができたので発表をさせていたいたら、思っている以上に皆さんが共感してくれました。ただ、書道界とか画廊などの間では、そんな独特な書を手がけている人はいなかったし、スタンダードな書道というものの概念の中に皆さんがいらっしゃるので、私の書風や新しい発想に対しては評価が難しい面がありました。ただ、書道学校の校長先生が「やってみなさい」と背中を押してくださいました。私が大きな安心でした。他方で、私を応援してくださいました方たちは、一生懸命生きていらっしゃる皆さんでした。当時の私の書はまだまだ拙いものですが、ことばだとか色だとかの表現に共感していただいたので、励ましていただいたので、今日までやっていくことができました。

Q 書に込められた思いはどのようなものですか？

40代や50代の時に書いていたことばと、今のことばは確実に違ってきています。私が過去に記したメモを見ると、「30代、生活のために書かなかった。生計を得るために書いた」、「40代、楽しむために心の書を書いた。生活の中から生まれることばを書いた」、「50代になった時に独りよがりにならないように。共に感じあえる書を書きたいと思った」と書いてあります。そして、60代になった時にどうなったかという、「自分を整えるための書を書きたい」とありました。今はもう70歳を超えてしまいましたが。

ある方が書は文学だと述べた論説を見ました。でも私は、書は文学であると同時に音楽でもあると思ったんです。そして、音楽であるとともにことばは考え方の基本だから、そこには哲学があるはずだと思いはじめ、以来、書を書くことよって私はどう生きていくのか、いつも考えさせられるのです。哲学というのは、どう生きるか、どうありたいかというのを探求することです。それは螺旋階段のように一つ一つ登っていくしかないものですが、それは書の世界でも同じで、心の変化、つまり泣いたり、笑ったり、苦しんだり、喜んだりしたことが筆や書風に現れて、ことばや形を醸し出していく。その過程は哲学同様に螺旋階段のように上昇しながら意識も考え方も変化して昇華していくものだと思います。

【2面に続く】